「芭蕉文考」翻刻　解説

ここに全文を紹介する『芭蕉文考』については、本誌第三号の拙稿「幻住庵記の異文の一つ」に述べておいたので、あらためて詳しい紹介を試みることは控えたい。本書に収めるところの幻住庵記が未発見のもので貴重な資料であることもくりかえすには及ばないと思うが、一、二気のついた点を補足しておきたい。

第一に本書の筆者がはたして原著者であるかどうかという問題である。内容を見ていたゞければわかることであるが、本書に引用されている漢詩文に誤文宛字が非常に多い。これほど和漢の詩文に明るい著者でありながら何故にこういう誤りをおかしたのであろうかと考えたくなるほど多いのである。中には筆写の際におかした誤りではないかと思われる個所もないではない。だとすれば、当然考えられることは本写本が誰かの著書を筆写したものではないかということであろう。そういう点については、本書が孤本であるために今のところ何とも解明の手段がないのであるが、本書の利用者が、引用の際にいま一度原典（本書に引用された詩文）にあたつて、誤りをおかさぬよう注意すべきであることはつけ加えておきたいことである。

つぎに、本書の内容の全般についてであるが、古註にありがちな衒学的な引用詩文の集積という弊を割引しても、従来行なわれている芭蕉文集の註解に漏れている新見はかなりな量に達する。また本文の批判にも一家の言をもつている点にも見るべきものがあり、かた〳〵資料的価値を充分に持つているものと考えられる。写本というよくない条件の下であえて翻刻して研究者の便をはかる所以である。

なお、翻刻にあたつては、句読点括弧を附し、頭注を本文の該当個所に括弧でかこんで組み入れる等、一般に行なわれている方法にならつたが、字体については活字では再現できない部分も多かつた。もし疑問の向があれば、是非原本について見ていたゞきたい。都合のつくかぎり便宜をおはかりしたいと思う。

最後に、翻刻にあたつて東大大学院森川昭氏の御協力を得ること大であつた。附記して深謝する次第である。

（板坂　元）